

活動報告書

報告者氏名： 佐々木 華奈 所属：鳥取養護学校 記録日：2013年 2月 18日

【対象児（群）の情報】

・学年

小学部1年生の女子1名

・障害名

チャージ連合

・障害と困難の内容

初めてのことや物には抵抗があり、触れようとしない。また、注意が散漫なため周りの人の動きが気になり、手元を見ながら操作するのが苦手である。思いや要求はあるが言語を発することができないため、おねがい（両手を1回合わせ）、ください（両手を2回合わせ）、返事（手を挙げる）、トイレ（下腹をたたく）、うなずくなどの限られたサインでコミュニケーションを図っている。教師（大人）からの指示言語はある程度理解している。

【活動目的】

・当初のねらい

言語でのコミュニケーションが難しい対象児に、iPadを用いて思いや要求を伝えながら主体的に活動できることをねらいたいと考えていた。家庭では思いや要求を動きで表現し、行きたいところに四つ這いで移動して、おもちゃを引っ張りだしたり絵本をばらまいたりする姿が見られる。しかし、対象児は小学部1年生で入学したばかりであり、周りの状況を把握し、環境に慣れることで精いっぱいなところもあった。

学校では、教師からの言葉かけを待ってから行動をしたり、尋ねると応えたりして受け身な姿が多かった。iPadに対しても同様で、まずは自ら触れることすら難しい状況から始まった。iPadに触れてコミュニケーションを図ったり、一緒に遊んだり、さらに、視覚的な見通しを持たせたりすることで、活動に向かう態度がどのように変化するかを観察することを目的とした。

・実施期間

平成24年7月～平成25年1月(校外学習での使用は10月24日)

・実施者

佐々木華奈

・実施者と対象児の関係

担任

【活動内容と対象児（群）の変化】

・対象児（群）の事前の状況

対象児は小学部1年生で、今年度入学してきた。入学からしばらくして担任やクラスの雰囲気慣れてくると、色々なものや人に興味をもって自ら関わろうと手を伸ばしたり、自分の要求を指差しで教師に伝えたりといった積極的な姿が見られた。その反面、初めてのこと・物への恐怖心が強く、初めての物に触れる場面や、初めてのことを経験する場面では大泣きをすることが多かった。手指の操作としては、親指と人差し指で豆をつまむ程度の器用さがあるが、「見ながら操作する」ということに困難さがあった。自分の経験から、手元を見なくても適当に操作することもあった。

iPadを提示しても、見ない、触れない（手を引っ込める）という段階からスタートした。

・活動の具体的内容

①「うごくお絵かき」「エレベーター」「Kids Music」「リズムプラス」「カラフル風船」「ちょんちょん」などのアプリを提示し、とにかくiPadを見て、触れることを繰り返し行った。

②朝の会でスケジュールボードの提示、写真カードと場所や具体物の一致の学習を日常生活の中で取り組んだ。

③校外学習でiPadを利用しながら活動する。

・使用したアプリ「おでかけCS」「YouTube」
<ねらい>

校外学習は自発的な要求や動作が少ない児童にとって、受け身になりやすい学習である。しかし、学校の外でしか味わえない季節感や社会体験が存分に味わえる学習である。そこで、より見通しを持って、主体的に活動ができる校外学習にするために、iPadを取り入れることにした。

<具体的な内容>

- ・iPadを操作しながらスケジュールを確認し、校外学習の活動に見通しが持てるようにした。
- ・写真とマッチングさせながら木の実に触れた。
- ・秋みつけをしながら散歩する中で、大好きな秋に関する曲を聞き、楽しみながら校外学習に積極的に取り組めるようにした。

・対象児（群）の事後の変化

○iPadは自分が遊べるもの、楽しいものと理解することができ、自ら求めて触れることができるようになった。

○iPadに触れることが、児童にとっての他の活動への意欲を高める強化子になった。

○事前にスケジュールを写真と共に伝えることで、初めての場所でも不安になることなく、意欲的に車いすを操作するなどして過ごせた。

○初めて見る物には絶対に触れたがらない過敏のある児童だが、大好きなiPadで写真を確認しマッチングをしながらどんぐり等を提示すると、躊躇なくそれに触れることができた。

○見つけた木の実に関する音楽を流すことで、終始楽しみながら校外学習で活動することができた。



【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

対象児は、学校での活動に受け身なことが多く、何度も繰り返して活動をすることで、本来の力を発揮できるようになる。特に校外学習等初めての場所や初めてのことに挑戦する時は、自分から要求を伝えたり、手を伸ばしたりすることに躊躇し、より一層受け身になりやすい。今回、校外学習で iPad を用いてスケジュール確認や写真と具体物のマッチングをしながら活動を行うことで、自分のやるべきことや活動に見通しが持て、落ち着いて活動に取り組むことができた。自分からどんだりやまっぼくりに手を伸ばしたり、車いすを操作して移動したりする主体的な姿も見られた。こわばった表情や不安で泣きそうになることなく、終始笑顔で過ごし、笑い声も出て、校外学習を楽しむ様子が伝わった。

- ・今回は、はっきりとした数的根拠のあるエビデンスを挙げる報告はできなかったが、対象児にとって iPad は、コミュニケーションや生活を豊かにする機器になるという可能性を十分に感じる事ができた。今後も、卒業後を見据えた指導を継続して行っていきたい。

活動報告書（例）

報告者氏名： 高橋麻衣子

所属： 東京大学

記録日： 2011年6月28日

【対象児（群）の情報】

・ 学年

小学5年生の男児2名（A, B）

・ 障害名

A 児：ADHD, B 児：学習障害

・ 障害と困難の内容

A 児：集中力がない。文字に注意を向けるのが難しく、教科書を読むのが苦手

B 児：話したり聞いたりすることは普通にできるが、読むことが遅く、本を読むことをいやがる

【活動目的】

・ 当初のねらい

読むことが苦手な全般的な学習への意欲をなくしている対象児に、自信を取り戻すきっかけを与えたいと考えていた。授業がわからなくて自信がないというよりは、わかっているのにテストの点数がとれないために学習意欲を失っているように観察されたため、テストに工夫が必要だと考えた。対象児は読むことに困難を抱えているため、iPadによって読むことを支援することで、テストを受ける態度がどのように変化するかを観察することを目的とした。

・ 実施期間

iPad を使って社会科のテストを2回実施した。実施日は11月27日、12月18日。

・ 実施者

福島紀子（特別支援教育士）

・ 実施者と対象児の関係

通級の担当教員

【活動内容と対象児（群）の変化】

・対象児（群）の事前の状況

対象児は同じ学級に在籍し、どちらともテスト成績がふるわなかった。これまでのテストにおいては、通常学級で一斉に実施していたが、2人とも読みに苦手感を持っているために開始早々にあきらめて投げ出してしまふ様子が見られていた。

・活動の具体的内容

iBooks のアプリを利用した。読みの困難さを補償するため、テスト問題をスキャンして PDF 画像として iBooks に取り込んだ。これによってテスト問題をピンチアウトによって児童自身が好きなように拡大することが可能となり、見やすく読みやすくなるのではないかと考えた。このアプリを使用したテストは通級において特別支援士の監督下で行なった。

・対象児（群）の事後の変化

iPad を使用した対象児は2人とも、自身で拡大をしながら最後までテストに取り組んだ。

【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

対象児はこれまでテストに対する意欲が著しく低かったが、iPad の画像拡大機能によってテストに書かれている文字が読みやすくなったのか、テストを受ける意欲が向上したように感じた。

・エビデンス（具体的数値など）

表1に、対象児のテスト得点と、学級の平均点を示す。A児の社会科のテスト得点は、iPad を使わないと平均33点（学級平均85点）であったのに対し、使用した2回のテストの点数は85点（学級平均83点）、90点（学級平均92点）となった。一方で、B児の得点は実施前平均27点、実施後50点、53点であった。iPad を使った感想を尋ねると、2人とも「これを使ったほうがやりやすい」と答えた。

表1 実践前後のテスト成績

	実践以前	iPad 使用 1 回目	iPad 使用 2 回目
A 児 (ADHD)	33	85	90
B 児 (LD)	27	50	53
学級平均	85	83	92

・その他エピソード

A児はiPadを使ったテストによって成績が著しく向上し、自身も「これがあればわかりやすい」と学習に対する意欲を見せたので、教科書を同様にスキャンしてiBooksに入れて、通常学級での授業に使わせている（図2）。今後、この学習効果を検討していく予定である。一方で、B児についてはテスト成績がA児ほど向上しなかった。この原因として、彼は視覚だけでなく音韻的な処理の困難さを有していたことが考えられる。今後、テスト問題をワード文書やePub形式で作成してVoiceOverで読み上げさせ、この効果を検証するつもりである。



図1：電子化したテスト 図2：通常学級内での様子